

## 詩同人誌評

### 第6回

# わが愛するロシア どこへいこうとしている

中塚鞠子

身体は綿毛のように溶けていく

空へと放たれた翼は囁きとなり

数万光年彼方の声となるまで彷徨うのだ

〔沈黙から〕

扉を閉ざして物語は終わる

物語の果てに私は何を見ただろう

荒涼たる砂漠 あるいは…

閉ざされた扉の裏にはまだ

数多の物語が星雲のように息づいている

〔沈黙へ〕

この言葉少ない「沈黙から」「沈黙へ」に

魅かれる。一つの声を聴く為に、沈黙がこれ

ほど意識の広がりを伴うものか。沈黙がいか

に深く多くのものを秘めているものか、とい

うことを感じさせてくれる。

正岡洋夫「橋と夕陽」〔RIVIERE〕184号

〔略〕

橋のまん中で欄干に凭れて

こちらを見ている人が

小さな影になって揺れている

橋の向こうに夕日が沈むところだ

〔略〕

雲も風も光の渦になって街を照らしている

すると街は一瞬反転して別の風景になった

私の横を叫びながら兵士が走っていった

道の両側には瓦礫が山のように積み

レンガの壁には焼け焦げた砲撃の痕

〔略〕

突然轟音がして爆弾が降ってきた

屋根が私の前に落ちてくる

〔略〕

そうして、私は路地の角に立ったまま、ま

だ夕日が沈むのを見ている状態に戻るのであ

る。

平和に暮らしている中でも、常に戦いを余

儀なくされている人々がいることが心に潜ん

でいるのだ。ウクライナでルワンダでミヤン

マーで起きている戦闘が浮かんでくるのであ

る。作者の年齢は判らないが、映像ではなく、

かつて戦争の経験があれば、なおさらかもし

れない。夕陽の光が幻想のように、意識の流

れがうまく最後現実にもどって処理されてい

る。萩原朔太郎の「猫町」を思わせる。

今狼人「孤」〔四百代言〕（現代詩神戸278号）

泣きながらご飯を食べた事があります

か？ そうですか。私は何度もあるのです

別に理由なんてないのですが。泣きながら

道を歩いていた事は？ そうですか。不思

議です。訳なんてないのに。でも何故だか

涙が湧いてきて、濡れ落ちてしまうのです

沢山の同人誌を見ていると、それぞれの特

色がわかってくる。もちろん、テーマを決め

て特集を組んでいるものは当然だが、詩の傾

向が似通ってくる傾向があることに気がつく

これは同人同士が刺激し合っていて出ているもの

なのだろう。モダニズム系のもの、美しい抒

情詩系、生活詩、社会詩といった風に、なぜ

似通ってくるのか不思議な気がする。

今回は気ままに、面白かったものを取り上

げてみたい。

北口汀子〔RIVIERE〕184号の二つの短詩。

一つの声を聴く為に私の細胞は耳と化した

耳は三十七兆もの翼となり

何かを思い出して？いいえ、そうではないのです。(略) あれはどこだったか、いつの事だったか。とても難びた所を走るバスに乗っていたのです。ふいに何の前触れもなく、たまらなく悲しくなってきた涙が止まらなくなり、乗り合わせた乗客の視線を避けるように、見知らぬ停留所で降りたのです。するとそこには、ずっと以前に亡くなった父と母がいるのです。そういえばあの頃、貧しかったあの頃。いつも皆でまん丸のお膳を囲んで。妹も弟も、並んでご飯を食べていました。楽しそうに、ええ、笑いながら食べていました。

この、不意に悲しくなるということは誰にでもあることかも。心の深いところに沈み込んでいる潜在意識が不意に現れるのだろうか？訳もなく悲しくなり涙が出るのだろうか？バスを降りたシーンで、妹や弟が楽しそうに笑いながらご飯を食べているのを思い出すところで、タイトルの「孤」が浮かび上がってとてもいいと思う。

他の散文詩「雨」「音」「絵」も印象的だった。力津耀子「これ」と「あれ」(「現代詩神戸」278号)

どうしてなんだらう  
「これ」をしようとすると

「あれ」をおもいだし  
「あれ」のほうが大切かもと  
迷いだす

それでも

「これ」にこだわり

そのまま

「これ」をすすめて

また迷う

「あれ」をかたづけろるほうがさきだ

「あれ」をすこしすすめたところで

やっぱり「これ」がさきだと思う

(略)

この詩は、ほんとうは「これ」も「あれ」もやりたくないのだから、と自分の心を見つめながら、「これ」も「あれ」もやり終える所で終わるわけだが、「これ」と「あれ」は何かわからないが、わからなくてもよい。普段よくあるフラストレーションの状態を表現して面白。

青木左知子「籠り部屋の雨季に」(「Messier」59号)

額のなかでリングが病んでいる

紅色を黒くませ

呻き声で崩れをこらえている

(略)

藤椅子の背に淡い痛み 這いのほり

組み合わせた膝の軋みへ あやとり糸が

ととき (略)

時間は

刻々と流れている

疾々と流れている

額の中にも それはあつて

(略)

窓を打つ雨音の途切れに

饅えたたにおいの浸潤

(略)

額の中のりんごや藤椅子、あやとり糸に人格を与え、湿った閉ざされた部屋に耐えさせているところが面白い。この人は独特の感性を持っている。最後に、私を登場させて、額のリングに食らいつかせているところ、賛否両論かも。

中山功「濃厚な森の緑の」(「三重詩人」259号)

きつとあいつらは

あそこから見ている

恵比寿神社のすぐ上の

燃え上がり空に挑みかかる

濃厚な森の中から

(略)

オレの身体は

ほとんどが水で

牛や豚や鶏 魚や貝や海藻 野菜や果物  
米や酒でできている

オレは

生き物の命を買って生きている

オレは

オレであってオレではない

人間はスーパー捕食者なのだ

(略)

あいつらはきつとオレを許さない

畑から大手を振って帰るオレを許さない

森に隠れて暮らすあいつらは

何の権利も主張しないが

自由にあこがれている

(略)

濃厚な森の緑の中に

汗としょんべんと涙に基づく

堂々たる宣言の季節が

もうすぐやってくる

濃厚な森の緑の中にあるもの、革命を起そうと狙っているものとはいったい何なのだろうか。確かに人間は、あらゆる動植物の頂点に立った。オレはその自覚の下に反省しながら暮らしている。作者は優しい人なのだ。

### 吉田定一「青空」(「イリヤ」21号)

朝日が ああと 歓喜の声をあげて

目覚める 今日 青空

今日も 青空のどこかで また争いが：

ひとは 傷つき 人は死ぬ

生と死のはざまで おろおろと

泣き叫ぶ 子どもたち

平和への祈りを 連れて

時間が おろおろと 佇むなか

夕日が ああと 慙愧の声をあげて

われらの 胸の地平へと 沈んでゆく

何も言えないほど完成された詩だと思うので全文載せさせていただいた。三連目がない方が、おろおろしないですみ、私は好みだけれど。ベテランの素敵な詩である。

### 黒田ナオ「石の階段」(「どうるかまら」32号)

夕暮れて

曲がり角を曲がると目の前に

暗い大きな穴がぼっかりと空いている

ついうっかり、その穴をのぞき込んだばかりに

もう家には帰れなくなってしまうた男は  
長い石の階段をひとり下りてしまう

覗き込んで帰れなくなってしまう穴は、あらゆる欲望の誘惑の罫なのかもと思って読むと、途中でカラスがやめとけえ、と鳴いたり、お前の帰る場所はどこではないはずだという声が 聞こえたり、喪服の人たちが階段を横切ったりする。遺影を抱えて泣いている女の人に見おぼえがあつたりする辺りから、違うとわかる。

残された男は

ぼんやりした表情のまま

また一人階段を下り続け

(略)

あなた、と呼ぶ声がある

お父さん、と呼ぶ声もある

しかし振り返ってみても

やつぱりそこには

もう誰もいないようだ

石の階段は面白い発想だと思う。死はどこにでも不意に訪れる。少し種明かしが過ぎる気もする。

### タケイ・リエ「さざ波」(「どうるかまら」32号)

わたしはその女のやさしい肉に

触れたことがなかった  
彼女はいつも彼のうしろにいた

抱いていると部屋がいっぱいになってしま  
まう

だから夢にすこしずつ溶かしているんだ  
彼がまっすぐに触れていると知って  
わたしは彼と彼女が燃えつきたあとと  
さざ波立つ世界をおもった

(略)

人をあたらしくするのは残酷だ  
加速のきもちよさは人生を走らせ  
あたらしい女のあたらしい肉のほかに  
名前を持つものはなにもなかった  
だれかが出てだれかが入ってくるだけだつ  
た

これは、男と女の愛の物語(あえて言えば  
性の物語)なのだろうが、なんとドライで合  
理的な哲学だろう。元来そういうものかもし  
れないが。

吉本有紀子「十月の日記の上を」(「どうるか  
まら」32号)

小さな二匹の引き綱を引きずり  
老いた人は坂道に向かう  
まるまった背に肩かけをまとい

(略)

のほりきれば 低い丘の上に  
切り落とされる まあたらしい落日  
遠い日々に ありつづけたもの

草の繁茂する水量のうすい川は  
褪せたシルクのサツウの色に  
街を片寄せて 北に消える  
十月の日記の上を

(略)

これはちょっと不思議な詩である。二匹の  
犬を連れた老女が丘の上まで坂を上り、落日  
を見る。水量の少ない川が街を片寄せて北へ  
消える。川は北へ流れているということか。  
そして十月の日記の上を、となると、過去の  
話だろうか。そして最終行が、しらみはじめ  
る、で終わる。しらみはじめるといえれば朝な  
のである。立ち位置と時間が分かりにくい。  
ただ(いつかため池にしずめた丸石の体積  
が/屋上のしずかな受水槽によって/あふれ  
よせる)のような魅力的な表現に魅かれる。

「いのちの籠」は「戦争と平和を考える詩の  
会」の詩誌である。誰も戦争や侵略を好む人  
はいないし、皆平和を望んでいる。にもかか  
わらず、ロシアのウクライナ侵攻である。今  
では、エネルギー不足、食料不足、急激なイ  
ンフレなどで世界中がひっくり返っている。

あちこちで右寄りの政権が誕生し、ロシア  
を是認する国が増えていつている。アメリカ  
の中間選挙も目の前である。どの国も「今や  
世界の警察などやっつけていられない、自国フ  
ースト」になっていく。自国民の生命が大切  
なのだ。  
山崎夏代「ウクライナ2022」(「いのちの  
籠」51号)「生きる」

戦場の地下道に座って つぶやく 少女  
生きていきたいの  
少女は かつての わたし  
あるときの 沖繩の あなた  
ベトナムの 中東の 南米の

と過去の戦争に思いをはせている。

島崎文緒「ロシアとウクライナ」(「いのちの  
籠」51号)

まだ寒い春の朝 枕元のラジオを聴く  
グラスノフ ラフマニノフ  
リムスキー・コルサコフ ポロジン  
ムソグロスキー チャイコフスキー……  
北国の哀愁を帯びた「懐かしい旋律」  
優れた作曲家たちのロシアは  
わたしの愛したロシア

それは プーチンのロシアではない

ブーシキン トルストイ ゴーゴリ ドス  
トエフスキー チェーホフ ゴーリキーなど  
の文学者の名をあげ、作者は、私の愛したロ  
シアよ どこへいこうというのか、と嘆いて  
いる。

生命のせめぎ合いが始まろうとしている。

【受贈詩誌】

三重詩人 259号・CROSS ROAD 20号・イリア  
21号・KAIGA 120号・笛 300号・異郷 60号・潮  
流詩派 270号・現代詩神戸 278号・ぼとり 67号・  
Messer 59号・りんごの木 61号・詩人会議 710  
号・いのちの籠 51号・石ノ森 195号・交野ヶ原  
93号・どうるかまら 32号・軸 144号・  
RIVIERE 183号・梨翠書 6・7・8号・  
Les alizes 209号・波蝕 30号